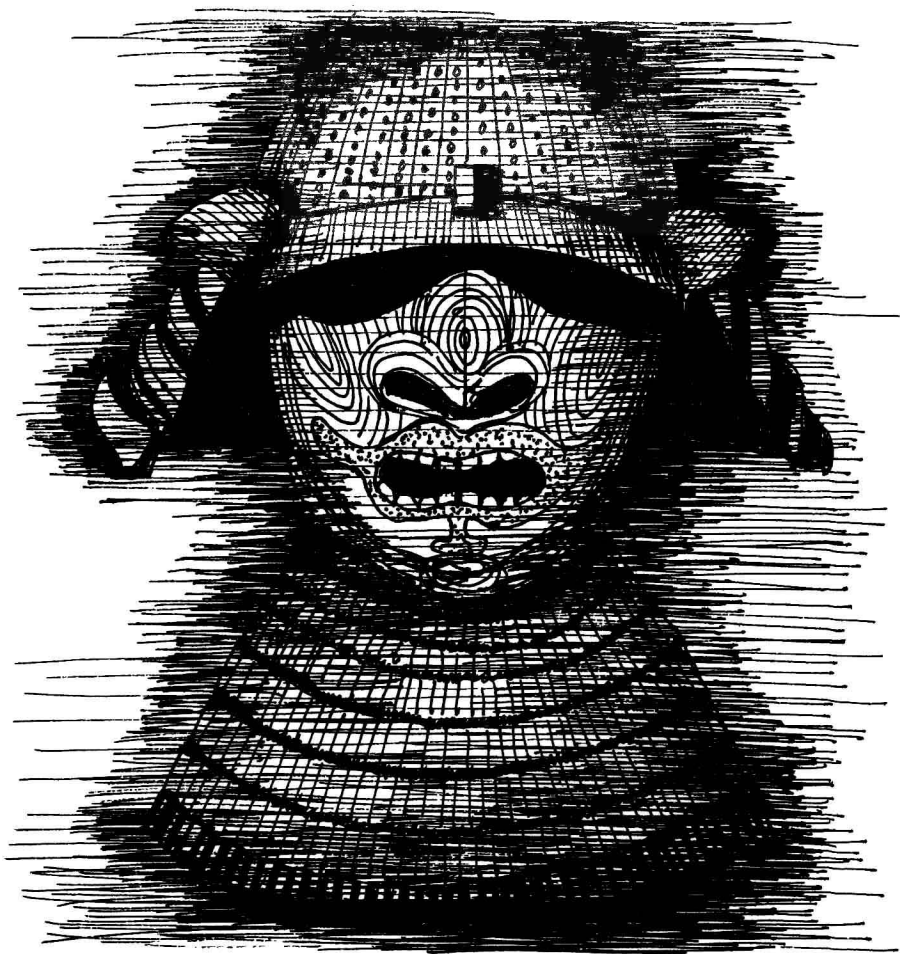


鬼灯

—撰津守の叛乱—

司馬遼太郎



中央公論社

鬼ほお灯ずき
— 摂津守の叛乱 —

昭和五十年十二月十日初版発行
昭和五十年十二月二十日三版発行

著者 司馬遼太郎

発行者 高梨 茂

印刷所 株式会社精興社

製本所 大口製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二丁目
電話(五六一)五九二一
振替 東京二一三四
©一九七五 検印廃止

鬼
灯
— 摂津守の叛乱 —

登場人物

荒木摂津守村重

安見野

妻

瑠璃葉

側室

おこう

瑠璃葉の侍女

竹阿弥

村重の下僕

川北谷のおやえ刀自

田川権左衛門

村重方の密使

高山右近

多田重四郎

安見野の実弟

昆陽ノ小侍従

安見野の侍女

石橋新八郎

田宮吉祥丸

山崎新兵衛

多田将監

田川兵庫入道

権左衛門の父

石橋采女

新八郎の兄

初野

安見野の侍女

羽柴秀吉

オルガンチノ

ゲンゴロウ

オルガンチノの従者

久左衛門の内儀

久左衛門の姫御料人

吉田将監の内儀

馬廻り監物の内儀

伊勢

笛を吹く安見野の侍女

伊賀

安見野の侍女

丹波

安見野の侍女

幕があがると、闇。

闇の空間の中央、宙空あたりに、鬼灯色（ほおろぎいろ）の玉が浮かんでいる。フット・ボウルの玉ぐらいの大きさ。ぶきみに光っている。

人間の生命を象徴するかのごとく、人間の誠実を象徴するかのごとく、人間のうらみを象徴するかのごとく、あるいは浮かばれぬ靈魂を象徴するかのごとく、逆に、そのむらぎもの怨恨を怖れる荒木村重の戦慄と恐怖を象徴するかのごとくでもある。

やがて、鬼灯色のもの消え、雨。

わずかに雷鳴。舞台上手から下手へ二人の人物動く。

一人は荒木村重。四十がらみ。旅の牢人風。蓑笠姿。黄金造りの腰刀が印象的。手に遠眼鏡（ととおめがね）を持っている。一人は従者の竹阿弥。同朋。坊主頭。四十前後。短袴。背に荷物。ゴザを肩に。さらに、大きなロザリオを右肩から左にかけているのが異様。明るくなると、二人、上手でも

つれ合っている。下手は崖。村重が上手に立ち、下手へ行って何かを遠望しようとするのを、竹阿弥が懸命に哀願し、御覽あそばすな、と制止している。

村重 竹阿弥、どかぬか。えい、どけ。

竹阿弥 見てはなりません。(ロザリオを両手いっぱいにと伸ばして遮る) このようなことがこの人間の世にあつてよいものか。なるほどあれなる崖つぶちまで行けば、目の下に、あなた様のはお城だけではない、ご家来のお人数もそっくりそのまま。いやご家来だけではない、あるうことか、奥方様まで。……生命あるものすべてをあなた様はお城ぐるみ置き捨て……。あれ、お城下が松明と篝火で火の海のようにじゃ。お城が櫓やぐらが地獄の浄玻璃じょうはりの鏡に照らされたがごとくあかあか見える。幾万のあの松明は、ことごとく織田信長の人数がかざしておるのじゃ……。 (しかるべき表情) 世にもおそろしい景色。……

村重 信長など、たれがこわいと言った。

竹阿弥 どうか正気に (と村重の胸を撫でるように) お戻りなされ。信長という名前を出すと、すぐあなた様はこう (昂奮する仕草) じゃ。竹阿弥は信長など怖しいとは申しておりませぬ。しかし、おそろしいのは、人間の臆病心。

村重 臆病だというのか、わしが。わしはただ、ふりかえって思えば智恵がありすぎた。

竹阿弥 智恵も臆病も一枚の紙の裏表。あなた様が敵である信長からも、味方であるすべてからも逃げた。あなた様はご自分の御国、摂津の国まるまる一つを置き去りにし、あなた様のお城である伊丹城、尼ヶ崎城、花隈城もすて、あたかも夜盗のごとく——ハハ夜盗と申せばこの竹阿弥の若い頃の稼業でござるが——闇にまぎれ、お城のあのせまい水門から犬のようにつくばって（しぐさをする）あなた様は身一つで、この竹阿弥だけを連れて、こう（しぐさをする）あそばしたわ。卑怯な、とは竹阿弥は申さぬ。しかしあれなる（下手をさし）情景を御覧になるお資格はない。見れば、あなた様は人間の皮をかぶった化物も同然。

村重 下郎にはわかるまい、勝つ、負ける、それは兵家の常。思ってもみよ、わしは信長の大名であったぞ。信長の下にいる六人の大大名。六人とは（やや、心地よげに、指を立てて）いま北陸にいる柴田勝家、近江にいる丹羽長秀、関東にいる滝川一益、それに丹波にいる明智光秀、さらには先年木下藤吉郎と申した羽柴秀吉、この五人に加えて、荒木（思い入れる）……摂津守村重。

竹阿弥 いかさま、左様でござった。あなた様は摂津一国の（ひろびろとした感じを示しつつ）王者でござったな。（笑う）このぞんざいな言葉遣いを許されよ。この竹阿弥はあなた様の御家来、御茶坊主として申し上げるのではなく、あなた様の幼な友達としていうのじゃ。思えば、あなた様は、奇妙な星のもとにお生れ遊ばしたお人でござるな。生国の丹波の山奥から、生

れ故郷でもない摂津の国に流れてきて、(指を折りつつ)池田、伊丹、尼ヶ崎、高槻、茨木、芥川、それら摂津の土豪どもたちをたちまちに丸めこみ、あちこちを斬りとり、やがては京を制したる織田信長の後押しを受けて、わずか十年を(思い入れる)出でずして摂津一国のぬしとなられた。唐土もろこしでいう英雄とはあなた様のようなお方をいうのであろう。しかしわたしにはいまだ為体が知れぬ。

村重
どけ。

竹阿弥 (揉みあい、飛びさがり、ロザリオを丸めて頭上で揉みながら) むごい、むごい。あれなるむごい情景を見たければ、この竹阿弥を殺してから見なされ。

村重 竹阿弥、忘れたか。わしは、虫いっぴき、殺せぬような。

竹阿弥 左様。まことに不思議(おどけたようにぐるぐるまわりながら、うなづく)あなた様は一介の牢人から荒大名にのしあがったわりには虫も殺せぬお人でござった。戦の場でも後ろで采配をふるのみで、槍先で(まねをし)人を殺したこともまずまずなかった。思えば、殺さなんだゆえに、摂津の土豪どもはあなたを信用したのであろう。

村重 わしが殺したかったのはたった一人、織田信長。

竹阿弥 あなた様は殺しそこねた。逃げた。

村重 ではない。持たみの中国の大勢力なる毛利氏が。

竹阿弥 毛利。(鼻息で村重への軽侮を短くあらわしつつ) 毛利が伊丹のあなた様に援軍を送るとの約束を破ったからであると?

村重 (狐憑きの表情になって) 破ってはおらぬ。まだわからぬ。毛利氏はかならず来る。要するにわしのせいではない。

竹阿弥 わしのせいでは? いつもそうでございますな、あなた様は。虫も殺さぬ男というのは、つまりは虫のいい男ということなのか。(息を入れて) 信長と申せばもはや天下をおおう一大暴風のようなものでござる。人間も、神でさえも、また仏でさえも、信長といえばおぞ毛をふるっている。(思い入れて) 天魔。それに対し、あなた様は、信じがたいほどの勇氣ではあるが、反逆なされた。

村重 (自嘲するように) 勇氣か。……勇氣といえるかどうか。わしは追い詰められておった。あの天魔のような信長めに、わしは忠誠心を疑われていた。光秀、明智日向守光秀が、わしに耳打ちしてくれたことがあった。(低声で) 貴殿は疑われている。貴殿の配下が、敵方の石山本願寺に兵糧を売った、そのことで上様は、信長は、あなたに謀叛むだんの心がある、と。わしにとつて、あらぬ疑いとはいえ、あの信長めに、天魔めに、一旦疑われればサソリの(腕をつかみ) 毒を受けたも同然。あのときわしにのがれる道があったか。(思い入れて) 謀叛以外に……。

竹阿弥 早まりなされたわ。

村重 いや、聞け。わしは決断した。

竹阿弥 決断、ご家来のだれもが反対した。あなた様お一人が決断なされた。

村重 いや、聞け。わしは、わしが持っている摂津の国の五つの城——伊丹、尼ヶ崎、花隈、それに高槻、茨木の城、その城々の門という門を閉出し、京の信長に対して反逆を宣した。信長めは、泡を食ったわ。あの信長があるうことか、哀れなほどの猫なで声を出し、わしをかすがごとく、なだめの使いをよこしおった。覚えてるか、使いとして、明智光秀も来おった。それに、木下藤吉郎、いやさいまは羽柴筑前守秀吉、あの猿のような顔をしたくたらぬ小男もきおった。(笑う。だんだんいい気持になって) たれもが、泡を食いおった、その使いの誰もがわしの膝をさすり、手をとって、摂津守よ、おぬしに不足不満があれば上様は三カ国でも五カ国でも与えてとらすとおおせられておるぞ、謀叛などはやめよ、などと申しおった。うそじゃ、人をだますことの名人のあの信長めが、左様にわしをすかして、あげくは(胸を突くまねをして)グサリ。わしは振りきった。荒木摂津守村重は、戦ったわ。(と劍を抜く。が、すぐ、劍を落す。茫然)

竹阿弥 (静かに劍をひろって村重の鞆におさめ、やさしげに) 本当のことを申し上げましょう。あなた様は戦ったのではない、じつは何もなさらなかった。勝ちもなさらず、負けもなさらず、

籠城一カ年あまり、あなた様はお城に居すくんでいなさっただけではござりませぬか。

村重 わしは、待っていたのだ。

竹阿弥 毛利を。

村重 中国の大勢力なる毛利氏の来援を。わしは信長の敵である毛利氏と密約した。毛利氏は海を越えて、伊丹へ大軍を送ってくる。たしかに毛利氏は約束した。しかし、三月待っても来ず、五月待っても来ず、一年待っても……

舞台、暗くなる。

気味の悪い遠雷。次第に近づく。一瞬、稲妻。

村重 (稲妻に照らされて、崖つぶちにおいて、遠眼鏡をかざそうとする)

竹阿弥 (暗い中で必死でめがねをとりあげようとする) この人非人。あなた様は、あのおそろしい情

景を見ようとなさるのか。あなた様のいう天魔、信長めが、あなた様に条件を申し入れたではござらぬか。あのとき、あなた様はどうしておられた。ご自分の本城である伊丹の城をすてて尼ヶ崎の城まで遁れて居すくんでおられた。あなた様がお逃げあそばした本城である伊丹の城は、女、子供五百人をふくめて数千。それを五万の織田勢がかこんでいた。信長は、尼ヶ崎なるあなた様のもとに、このように申し送ってきた——尼ヶ崎の城を開け、開けば、伊丹城の女どもの命はたすけてやると。その時あなた様はどうなされた。

村重 わしは。……

竹阿弥 何もなさらなんだ。あなた様は尼ヶ崎に居すくんだまま信長へお返事もなさらず、戦いもせず、何もせず、ただわが身一つ、この竹阿弥をつれて、お逃げなされた。信長は、約定によって、伊丹の城にあなた様が置きざりにした女どもを、それも五百人——それらを磔に掛け、一人残らず刺し殺しに殺して。……

村重 (茫然と突っ立ちながらつぶやくように) すべてわしはわしの信念でやった。何を悔いることがあるう。

舞台暗くなる。竹阿弥の声のみ。

竹阿弥 五百人の女どもの中には、あなた様の奥方様もおられた。またあなた様があれほど愛しておられた御側室の瑠璃葉るりはのもの。(不意に気分を変えて) このロザリオは、瑠璃葉るりはのものがこのわしにまでお届けなされたもの。

雷鳴、稲妻のあいだに、にわかに、遠く、女(おおせい)の叫喚の音がきこえてくる。竹阿弥、それがきこえると、一瞬、棒立ち、つぎの瞬間、激しい感情をあらわす。人間として、あり得べからざるほどの変な動作。

竹阿弥 人間が、女どもが、鳥や野ねずみのように、焼きころされてゆく。(顔が、火照りで赤くなる。竹阿弥、おそろしきで顔をかかえこんでうずくまる)

村重 (身を転じてすでに崖の上にあり。村重の半身に火照り。村重、いままでと打って変り、骨が鳴るような慄えとともに、遠眼鏡をかざして崖の下を見ている。しかしある激しい感作がおこって、遠眼鏡を落す)

竹阿弥 あなた様がなされたことだ、この世に、あなた様というお方さえおらねば、このような地獄はおこらなんだ。私は、見る、見てやるのだ。(走りよって遠眼鏡をひろおうとする)

村重 (先刻とは逆の態度で) 見るな、見てくれるな、竹阿弥、たのむ。(その遠眼鏡をひろい、のぞく)

切り裂くような笛、一声。

老婆の声 (天の一角から、静かな愛情をこめて) 蟬丸どの、蟬丸どの。

村重 (おどろく) だれだ、わしの幼な名前をよぶ者は。

竹阿弥 (虚空を見あげ、ゆらゆらと舞うように) 丹波の川北谷のおやえ刀自の声じゃ。幼いころ、

蟬丸どのとわしを可愛がってくれた、あの老いた巫女の声に似ている。(竹阿弥、見えざる糸であやつられる人間のようにゆらゆらと輪をえがいて声をもとめようとする)

老いた巫女の声 見えますか。その遠眼鏡にうつっている四つの百姓家が。その百姓家に、蟬丸どの、あなたがお城で召し使っていた女ども——身分のない台所の女やお針の女ども三百八十八人、それに若党中間百二十四人、あわせて五百十二人——が、けもののように押しこめ

られ、戸の外から火を放たれて。……人間の脂と血と肉が火となって燃える物凄さ。……

火照り大きく。村重、遠眼鏡をのぞきこんだまま、化石になったように。

老いた巫女の声　蟬丸どの、あなたは、七つの松の浜辺をごらんになっています。織田方の篝火。その篝火の一つに一つの礫刑台が立っているのが見えるはずですよ。篝火の数も百二十二、礫刑台の数も百二十二、それらが渚なみさに添ってかぎりもなくつづいているのが見えましょう。そのなかに、あなたの奥方やあなたの。……

遠くで、女の叫喚。

上手から、たった今死んだばかりの女達——おおぜいの亡霊群——が、一鼓動ごとにぶきみな規則正しさでせまってくる、村重の方へ。……竹阿弥、村重をかばい、亡霊団の前に立ちはたかる。

竹阿弥（泣くように）死んだ、みんな死んだ、ここは（と舞台をみまわし）冥界へ去ってゆく通い

路であったのか。いる、いる。あ、あなた様は御家老の久左衛門殿のお内儀。そ、そこには久左衛門殿の姫御料人も。あれにおわすは、西の丸の吉田将監どののお内儀ではござらぬか。こなたはお馬廻りの監物けんもつどののお内儀じゃ。あれにみどり子をお抱き遊ばされているのは、……みな居る、奥方付きの伊勢どの、伊賀どの、丹波どの、ああ、昆陽こやノ小侍こじ従どの。

亡霊団、白い透きとおった感じ。無言、無表情、やがて村重と竹阿弥を包むようにし、次いで